

『浅間山火山防災マップ2003年版』にみられる虚偽

Trick in the Asama hazard map of 2003

早川 由紀夫 [1]

Yukio Hayakawa[1]

[1] 群馬大・教育

[1] Faculty of Ed, Gunma Univ

2003年11月に作成されて住民に配布された浅間山火山防災マップ(ハザードマップ)には、重大な虚偽がある。山頂火口中心から3.8kmの距離にある浅間山博物館が「火口から4km」と書かれた円の外に表示してある。

1973年2月1日の噴火のあと、浅間山の周辺市町村長は山頂から4km以内を災害対策基本法63条による警戒区域に指定した。その後、火山が静穏化したときに部分的に縮めたことはあったが、それはあくまでも期間限定の例外扱いだった。警戒区域の原則は30年間に渡って4kmとされた。

気象庁が2003年11月から浅間山の火山活動度レベルを発表するようになったのを受けて、地元自治体が組織する浅間山火山対策会議は登山規制を火山活動度レベルに連動させることにした。2004年4月のことだった。新しいシステムでは、レベル1で500mまで、レベル2で2kmまで、レベル3で4kmまでを規制する。

ちょうどそのころ、新しい火山防災マップの作成が最終段階に入っていた。4km円の内に表示されるか外に表示されるかは経営に大きく関わることだから、火山博物館経営者がマップ表示に注目したであろうことは想像に難くない。最終印刷物で、火山博物館は4km円の外に表示された。

さて、気象庁は2004年9月1日の爆発直後に浅間山にレベル3を宣言した。レベル3は翌2005年6月21日まで10ヵ月継続した。その間、火山博物館は、冬季休業(12月~3月)と数日の臨時休業を除いて、毎日営業を続けた。火山防災マップ上で「火口から4km」と書かれた円の外に表示されていることが、その根拠として使われた。

過去に遡ると、火山防災マップの偽装は1979年に阿蘇であった。ロープウェイ山頂駅(火口東駅)は、気象庁が作成した阿蘇火山登山規制区域図では1km円の内に表示されていたが、地元の阿蘇火山防災協議会が作成したマップでは1km円の外に表示されていた。実際には850mの距離にある。この偽装は、1979年9月6日の爆発で、ロープウェイを利用した観光客3人が火山弾に打たれて絶命したあとに広く知られた。

浅間山火山防災マップ2003年版は、国と地方自治体が、学者8名と観光業者2名を含む検討委員会を組織して作成したものである。その費用には税金が使われた。なお、浅間山博物館は長野原町営の有料観光施設である。

浅間山火山防災マップにみられる虚偽を、阿蘇のように死者が出るまで放置してはならない。いまずぐ解決する必要がある。解決するには、次の三つの方法がある:

- 1) レベル3時の4km規制円を、火山博物館のところだけへこませる。
- 2) レベル3に連動する規制を4kmではなく、3.8kmあるいはそれ以下にする。
- 3) レベル3のときは火山博物館を営業しない。

このうちのどれを選ぶかは、他の誰かに指図されることではない。地元自治体が自分の意思で決めることである。災害対策基本法63条によると、警戒区域の設定権者は、国でも県でもなく、地元市町村長のだから。

2004年9月の噴火のあと、観光客が来なくなるから浅間山のニュースをテレビで放送しないでほしいと願う声が地元では優勢だった。このような、臭いものに蓋をする考えはいまずぐ捨て去ろう。そもそも、郷土のシンボルである浅間山を臭いもの扱いしてはならない。浅間山のニュースがテレビで報道されることは、将来の観光客増加につながるとうむしる歓迎すべきである。

浅間高原は、大自然の驚異を目の当たりにできる稀有な場所である。そこにはおいしい空気と美しい景観が広がっている。浅間山がつくった宝だ。浅間高原に来ていただくお客様に、地元はできる限りの安全を提供する義務を負っている。それは、事実を正確にそして迅速にお客様に伝達することによって初めて可能となる。地図を偽装して、危険を安全だといいくるめるようなことは、絶対にあってはならない。

1961年8月18日の爆発で最後の死者が出てからまもなく半世紀になる。この長く続いた静穏期のあいだに、浅間山麓から火山文化がすっかり消えてしまった。以前のような活発な火山に蘇るのは地質学的にみて確実だから、浅間山を正しく恐れ親しむ文化をこの地に根付かせる必要がある。たとえば小中学校の授業に浅間山の学習を取り入れることは、いまずぐ始められることだ。浅間山麓の将来を担う子どもたちに、火山の危険と恵みをバランスよく過不足なく、教えよう。